平成２６年度　連合博士大学院　広域科学教科教育学研究報告書

国際移動による言語教育のあり方に関する研究

教育構造論講座　　浅沼　茂
言語文化系教育講座　　加藤　清方

１，イマージョン教育とエンパワーメント

本研究は、国際移動に伴っておきるその子女の言語教育のあり方について、より理想的なあり方は何かを探る研究である。言語教育にあり方についてはどのような人材を育てたいのかという理念がまず、はじめに問われている。すでに、この問題は、日本のみならず、世界中での大きな研究課題となっており、教育の現場では、多様な考えと実践がおこなわれている。しかし、言語教育にあり方についてはどのような人材を育てたいのかという理念がまず、はじめに問われている。その理念自体が多様であり、したがってその実践のあり方も多様である。このような多様な考えがある中で、カナダのイマージョン教育を研究してきたジム・カミンズの理論は特に重要であり、その実践の結果からの発言は、説得力あるものとなっている。特に母語によらない各教科の教育が、子どもの「エンパワーメント」につながるという発見は、イマージョン教育を実践している学校の多くの力を与えている。

イマージョンの教育は、実は、国際学校においてこれまで長い蓄積がある。しかし、それが一般の学校において、どのような形のカリキュラム実践が研究されることはなかった。本研究では、このようにイマージョンに近い、あるいは、そうとは意識せず、イマージョンに近い形になっている、外国人あるいは外国にルーツを持つ学校の子どもたちに、どのような成果をあげているのかを研究し、その成果について明らかにすることをめざした。

特に、第１に、日系ブラジル人の多い学校、そして、外国にルーツを持つ子どもが多い学校において、観察し、評価をした。第２に、外国において、国際バカロレアの学校において母語教育と外国語教育によって子どもたちの能力にどのような変化が見られるのかを探った。本研究は、現在日本の学校において日本語学級有無とその成果について多くの議論がなされてきた経緯に多様な示唆を与えることを目指している。

多くの学校では、外国籍の子どもがいながら日本語学級がないままに、一つのイマージョン的な学習環境の下で学習を進めることになっている現実がある。このような現実は、日本語学級の設置をすれば問題は解決するという単純化した発想では発展はない。このような言語能力だけで問題を片付けようとする枠組みは、一般的学力に加えて創造的な力や別の能力の発展については、看過されてしまう。

２，国際バカロレアとエンパワーメント

国際バカロレアなどのカリキュラムは、イマージョン環境の下で、学習効果を上げてきた実績がある。それは、一般校においてもそれが可能であるのかを探った。日本という文化環境の中で、国際バカロレアでの言語教育は、いつまで経っても外国語の習得が国際化であるような日本の国際教育の現状を、外国語を単なるコミュニケーションを道具として、創造的で表現力豊かな能力を育てるものとして枠組みを変えるように求めるものである。

国際バカロレアが特に注目されるのは、国際移動によって言語教育が目的として学ぶという位置から、コミュニケーションの道具として、いずれの地においても発揮しうる能力の標準化が試みられていることにある。土着化を目指した言語教育とグローバル化を目指した言語教育の意義には、大きな違いがある。

３，アメリカにおける多文化教育とエンパワーメント

シカゴのヒスパニック系の子どもが半数以上いる学校では、２週間ごとのイマージョン教育を行っていた。ここでの子どもたちは、単に言語を習得するために教授言語を交換しているのではなく、その言語がいずれでも表現や技能の習得が可能になるように学習している。子どもたちは、低学年においては、戸惑いながら、そして、高学年に向かうにつれて、いずれの言語において表現できるようになっていた。学力は、特に学校全体が秀でているということではない。けれども、劣っているという訳ではない。子どもたちの表現能力や絵や音楽で表現したものは、非常にユニークであり、優れていた。

ニューヨーク市の中心にある学校は、黒人やヒスパニックの多様な人種の学校であった。子どもたちは、貧しい環境、アメリカのワスプの文化とはかけ離れた異質の背景を持っている。その子どもたちにとっては、学校での英語は、イマージョン的な意味をもっており、その中で学校のやり方は、そのままの表現を許しながら、内容を多様に作っていくというやり方であった。教師は、子どもが作るストーリーをまず、絵画で表現させ、それに台詞をつけるというやり方をしていた。そのやり方は、即興的なものであり、特に、恥じらうことなく、そのまま表現するというやり方をずっとやっていた。その結果、子どもの作品は、大変な量となった。それは、そのままポートフォリオになるというよりも自分の毎日の生活が、絵物語として本になるというような感じであった。子どもたちの物怖じしないこのような態度は、そのまま、表現や創造的能力の開発につながるものであった。

４，日本の多文化教育と取り出し学級

日本では、特に、愛知県が、日系ブラジル人の子弟を始め、多文化状況にある学校が多くあることが知られている。本研究では、これらの学校のうち、特に、ブラジル人が多い学校を調査した。そこでは、単純に、子どもたちの文化的背景が問題となるのではなく、教師の姿勢が言語中心から、活動を中心として方方法へと転換することによって、多くの成果を上げていることがわかった。子どもたちは、発言力が豊かであり、それは、日本の子どもたちにもよい影響を与えていた。

言語能力は、初期段階においては、学力やその他の社会的能力の形成において、重要な位置を占めることは確かである。そして、年齢の発達段階によって大きな差が見られることは、確かである。しかし、言語能力の差が、そのまま、学力や社会的な発達にそのまま直接相関するかは、個人差だけでなく、多くの母語教論者が論じるほど、大きなものとなっていない。むしろ、このような言語能力の差は、一般的学力に加えて創造的な力や別の能力が育成されているということが、子どもたちの実際の姿をみて明らかになった。

取り出し学級は確かに、その初歩段階では必要とされる。しかし、ある程度文法や基礎語彙の習得がされたならば、実際にその言語を道具として使うことが重要であり、学習内容のみならず、さらに言語能力の向上につながることが見られた。英語や日本語「を」教えるのではなく、英語や日本語「で」教えるというイマージョン環境の下の方が、学習効果を上げてきたという実績については評価できた。

結論

本研究は、このような言語と個々人の能力発達の問題をさらに大きくとられること提起した。それは、バイリンガル環境にある子どもたちの表現能力と創造性の問題である。それは、一つの文化環境の中では、あまり気がつくことのなかった個人の能力の多様性と創造性という日本の教育環境においてはあまり強調されることの無かった、グローバル能力の基本的な資質を育てているということであった。この点については、多くの指摘がなされながら、実証的な研究は少なかった。本研究では、いくつかの学校での観察調査から、その手がかりを得ることができた。さらに、データを蓄積し、将来、さらにエンパワーメントした研究成果の一般化をめざしたい。